

芸術オータムセレクション

かもめ

アントン・チャーホフ 作

木内宏昌 翻訳・上演台本 熊林弘高 演出

このチャーホフに “かもめ”は出てこない

「(佐藤)オリエさんと(満島)ひかりちゃんと

で、何かやりたいね」という言葉から

スタートしたビッグな企画。

演出家・熊林弘高がチャーホフに挑む。

演出家・熊林弘高にとって、東京芸術劇場はホームグラウンドと言ってよさそうだ。海外および日本の戯曲から作品を厳選し、勉強会を立ち上げ、俳優と対話を重ねて、戯曲の深層を掘り下げる。1年間に1,2作品の専作を支えるためには、劇場からの協力も欠かせない。2014年「おそるべき親たち」、2015年「狂人なおもて往生をとぐ」とふたつの作品の上演を重ね、この演出家と東京芸術劇場との協働作業は軌道に乗ってきた印象を受ける。そして2016年、ついにというべきか。熊林弘高は、東京芸術劇場プレイハウスにて、演劇史にその名を刻む戯曲の高峰、チャーホフの「かもめ」に挑む決意を固めた。

死骸も剥製もなし。現物のかもめは使わない

チャーホフが書いた4幕劇「かもめ」には、2回、現物のかもめが出てくる。一度目は2幕の中盤。猟銃で無残に撃ち落とされた死骸として。二度目は、ラストの4幕。2幕で撃ち落とされたかもめが、剥製となって。今回の演出では、その2度とも「現物のかもめを使わない」というプランらしい。「かもめ」を演出するのは今回で2回目、という熊林弘高は、一度目の死骸のかもめについて、こう話す。

「以前やった「かもめ」(2004年)でよかったと思っているのは、現物のかもめを出さなかったこと。真っ白な原稿用紙を、『かもめです』とした。無名のアマチュア劇作家から小説家に出世するトレープ青年に帰属するものとしての原稿用紙。それは今回もやりたいと思います」

では、ラスト4幕の剥製のかもめはどのようにするのか。演出家には明確なプランがある。繰り返す。かもめは使わない。

「二度目の剥製のかもめについて前回は台詞ごとカットして逃げましたが、今回は、新たに着想を得たことで、全体像が見えた。この着想に集約させていくために、『かもめ』という物語が、どのようにしてそのラストまでたどり着くか。演出の挑戦ですね」

チャーホフは、苦くて哀しいこの戯曲の扉に「喜劇」と書いた。多くの演劇人を悩ませてきた二文字でもある。

「フランスの哲学者ベルクソンが言っていますよね。距離感を持って眺めると、それはすべて喜劇になる、というような内容でしたが…」と言い、正確な



衣裳・美術：伊藤佐智子 撮影：KEI OGATA

引用ができない、と断った演出家が、後日、わざわざメールでベルクソンの言葉を送ってくれた。メールにはこうあった。「引き離れてみたまえ、われ関せずの見物人となって生に臨んでみたまえ。多くのドラマは喜劇に変ずるであろう」(ベルクソン「笑い」より。林 達夫・訳)。なるほど。演出家もまた、そのような見物人になる仕事かもしれない。

満島ひかりのニーナを囲む、豪華な役者たち

片田舎の娘が、都会に出て女優を目指し、貧困生活に苦悶する。この戯曲を代表するキャラクター、ニーナには満島ひかり。ニーナの愛をもてあそぶ小説家トリゴーリンには田中圭。トリゴーリンを熱愛する大女優アルカージナに佐藤オリエ。大女優の息子トレープレフには、初舞台の坂口健太郎。そして、トレープレフに片思いをするマーシャに中嶋朋子。脇を固める人材も確かだ。小林勝也、渡辺哲、山路和弘、あめくみちこといった花も実もある実力派に、バンド「黒猫チェルシー」の渡辺大知と、若い未知の可能性をも注入している。

「ご出演される方々は、いずれも第一希望の人ばかり。もう演出家はいらないうくらい、すばらしいキャスティング」

いやいや、何を言いますか。21世紀の新しいチャーホフ・スタンダードの誕生に、期待しよう。

取材・文：タマカ冷郎

10月29日(土)～11月13日(日) プレイハウス 詳細はP10へ

作：アントン・チャーホフ 翻訳・上演台本：木内宏昌 演出：熊林弘高
出演：満島ひかり／田中 圭／坂口健太郎／渡辺大知／あめくみちこ／山路和弘／渡辺 哲／小林勝也／中嶋朋子／佐藤オリエ

宮崎、松本、札幌、滋賀、相模原、豊橋公演あり 主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

チャーホフ作「かもめ」あらすじ

ロシアの湖のほとりの仮設舞台で、劇作家を夢見る青年トレープレフは、粗削りな新形式の演劇を大女優の母の前で上演し、心に傷を残す失敗に終わる。この経験がふたりの人生を狂わせた。劇作家の卵トレープレフは失意のどん底に落ち、一方、主演を務めた若い娘のニーナは、本物の女優を目指して故郷を捨てる。仮設劇場を囲んだ人間たちが、縦糸に、横糸になって織りなす、切ない人生模様。

芸術オータムセレクション

国際共同制作 野田秀樹 作 オン・ケンセン 演出

三代目、りちゃあど

シェイクスピアを解体した 野田秀樹を解体する

野田秀樹がシェイクスピアに作家としての自身を重ねた幻の戯曲が、シンガポールの俊英の手で甦る。グローバルな活躍でアジアを代表する演出家オン・ケンセンにインタビュー。

「野田秀樹さんの舞台を初めて観たのは、1990年英国エジンバラ国際フェスティバルでの『半神』でした。もともと日本人向けに書かれたものでしょうから、日本独自の言葉遊びやカルチャーに被われていて、私には意味不明な部分もありましたけど、核にあるのがとてもユニバーサルなものであることは、はっきりわかりました。今回も、多言語・多文化のキャストが混在するパフォーマンスなので、ダジャレや九州弁のおもしろさは活かせませんが、核心部分は伝わるはず。私の責任は、それを作品から漏らさず探り出すことでした」

シンガポールを拠点に、多種多様な言語や文化背景を持つキャストによる作品を数多く手がけてきたオン・ケンセン。今回も日本とシンガポールの俳優に、インドネシアの影絵芝居ワヤン・クリのパフォーマーが加わる多彩な顔合わせで、1990年に初演されたきりの“幻の”野田戯曲『三代目、りちゃあど』に挑む。リチャード三世の史実と、シェイクスピアが創作した『リチャード三世』の世界に加え、劇作家シェイクスピアの日常生活までもが錯綜する多層構造。その枠組みの中で、劇作家と作中人物の関係から、歴史はどう描かれてきたか、といった根元的な問いにまで至る、複雑で壮大な野田ワールドだ。

「戯曲にある歴史に関わるせりふを、どう提示すべきかについて、演出に着手する前に直接野田さんに質問しました。まず“歴史”というと、一党支配



撮影：石川 純

芸術オータムセレクション

カミーユ・ボワテル「ヨブの話」
—善き人のいわれなき受難—

9月30日(金) 19:00

10月1日(土)・2日(日) 15:00

プレイハウス 詳細はP9へ

構成・演出・振付・出演：カミーユ・ボワテル



©Oliver Chabrial



撮影：石川 純

のシンガポール政権下で育った私たちは、歪められた史実を“歴史”として学ばされた経験を、ベースに持っています。また一方では、数年前にリチャード三世の遺骨が駐車場の下から見つかった、というリアルなニュースがありましたよね。ほんとうに背中が曲がっていたとかいなかったとか、ひとしきり話題になりました。このように、歴史が事実をどう反映させてきたかは、この作品の重要なポイントでもあるので、作者の意図を確認しておきたかったのです。野田さんの答えは、史実の正確な提示はさほど重要ではないだろう、ということだったので、私は自分自身の“教科書は史実を正確に伝えない”という経験を、演出に反映させることにしました」

歌舞伎の中村孝太郎、狂言の茂山童司、宝塚出身の久世星佳、小劇場の江本純子など、日本勢だけでもそれぞれ演技スタイルが異なる上に、役の性別が逆転するなど、ジェンダーもフリー。野田の言葉遊びや疾走感に代わり、多様性を強調する演出で、作家(シェイクスピアおよび野田秀樹)の複雑な脳内を覗き込むようなカオスを醸成する。

「リチャード三世は狂っていたのかもしれない、言動が論理的に意味をなさなくなり、つねに論理と非論理の闘いのような状態になっていた人。作家も、自身の意に反して、論理を超えたものを産み出すことがあります。この作品の中でも、シェイクスピアと、そのシェイクスピアを描いている野田さんともども、自身のコントロールを超えて、作家として存在し続けられなくなる状況が描かれています。私は、そんな混沌とした作家の頭の中に観客のみなさんを引き込み、半分夢を見ているような、論理やせりふが消え去った、音楽や絵画のような世界を、現出させたかったのです。四半世紀前に書かれたこの作品が現在に意味をなすように、空間と時間を使って新しい『三代目、りちゃあど』を構築しました。野田さんがシェイクスピアを解体したように、野田秀樹を解体することが、私の使命ですからね」

文：伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

11月26日(土)～12月4日(日) シアターウエスト 詳細はP12へ

日本語・英語・インドネシア語上演/日本語・英語字幕付 熊本、吹田、高知、福岡公演あり
作：野田秀樹 ウィリアム・シェイクスピア「リチャード三世」(小田島雄志訳)より
演出：オン・ケンセン
出演：中村孝太郎／茂山童司／ジャンヌ・コー／ヤヤン・C・ヌール／イ・カデック・ブティ・スティアワン／たきいみき／江本純子／久世星佳

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
アートクワンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

芸術オータムセレクション

芸術dance
勅使川原三郎×山下洋輔「up」

10月7日(金) 19:30

8日(土)・9日(日) 16:00 プレイハウス

構成・振付・美術・照明：勅使川原三郎 詳細はP9へ

出演：勅使川原三郎 佐東利穂子／山下洋輔



Photo: [上] Jimmy & Dena Katz / [下] Bengt Wansekus